

わたしの好きな昔話（3）

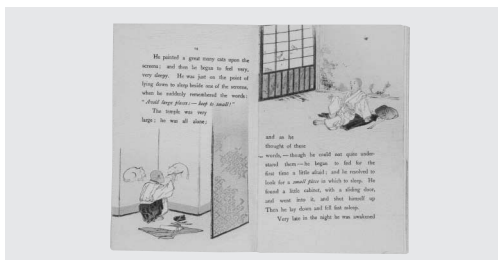
『猫を描いた少年 (The Boy Who Drew Cats)』(ちりめん本)

井口 すずな

日本の昔話、というのは大まかに言って四つのパターンにわけられるように思います。『竹取物語』のように昔の知識人が創造した物語と、『因幡の白兔』や『八頭ノ大蛇』などの日本書紀や古事記を原典とする日本神話、『金太郎』や『大江山』のような実際にいた人物の逸話、それから一番数の多いのが『浦島太郎』や民間で語り継がれてきた伝承です。私の好きな昔話の一つ、『猫を描いた少年』もこの民間伝承の一つです。少しマイナーなお話のようなのであらずじを書いておきますと、

く寺に預けられた小僧は経本から屏風、壁、柱に至るまで何にでも猫の絵を描いたので、和尚に家へ帰された。途中、小僧は妖怪が住みつく古寺にそうとは知らず泊まり、寺の大きな屏風に沢山の猫を描くと疲れて眠くなった。和尚から「夜は広い場所を避けよ」と言われていたので、狭い押し入れの中で寝ていると、外では大きな物音や恐ろしい鳴き声をした。朝になり押し入れから出てみると、牛より大きな化け鼠が血まみれで死んでおり、小僧の描いた屏風の猫たちの口は血に染まっていたので、描かれた猫たちが化け鼠を退治したことを知った。>

(京都外国語大学図書館ホームページより)
というお話です。



この『猫を描いた少年 (The Boy Who Drew Cats)』は東北から中国・四国地方に渡る広い地域に伝わる『絵猫と鼠』という昔話を元に小泉八雲によって書かれたものです。1898年から1922年に長谷川弘文社が来日した外国人向けのお土産として英文で出版されたちりめん本“Japanese Fairy Tale Series”のうちの一冊で、とても綺麗な水色の表紙の本です。日本では小泉八雲は『耳なし芳一』や『むじな』などの怪談でその名を知られていますが、この“Japanese Fairy Tale Series”のために書いたお話はどれも分かりやすく、明るいイメージのもので、ヨーロッパの人々が親しみやすいように、また日本文化に興味を持ってもらえるように八雲が心を砕いたもののように思われます。

ところで、当初は“Fairy Tale (御伽噺)”として世に出たこの物語は、日本語に訳された後では怪談集に収録されることが多いようです。これは、小泉八雲が怪談を沢山書いた為、八雲の作品集が怪談と銘打たれることが多かったことによるものだと思います。しかし、もしもこれが怪談として書かれたものだとしたら、絵から出てくる猫も、牛より大きな化け鼠も、そんなに怖いと思えませんが、起こることの全てを予期した上で小僧を窮地に追い込む和尚が物凄く怖い、ですよ。この作品を八雲が“Fairy Tale”だと思っていたのか、それとも「怪談」だと思っていたのか、もしも彼に会えるとしたら是非尋ねてみたいものです。

いのくち すずな (イスパニア語学科4年次生)